

私は猿楽町から神保町の通りへ出て、小川町のほうへ曲がりました。私がこの界限を歩くのは、いつも古本屋を冷やかすのが目的でしたが、その日は手擦れのした書物などを眺める気が、どうしても起こらないのです。私は歩きながら絶えずうちのことを考えていました。私にはさっきの奥さんの記憶がありました。それからお嬢さんがうちへ帰ってからの想像がありました。私はつまりこの二つのもので歩かせられていたようなものです。そのうえ私は時々往来の真ん中でわれ知らずふと立ち止まりました。そうして今頃は奥さんがお嬢さんにもうあの話をしている時分だろうなどと考えました。またあるときは、もうあの話が済んだ頃だとも思いました。

私はとうとう万世橋を渡って、明神の坂を上がって、本郷台へ来て、それからまた菊坂を下りて、しまいに小石川の谷へ下りたのです。私の歩いた距離はこの三区にまたがって、いびつな円を描いたとも言われるでしょうが、私はこの長い散歩の間ほとんどKのことを考えなかったのです。今そのときの私を回顧して、なぜだと自分に聞いてみてもいっこう分かりません。ただ不思議に思うだけです。私の心がKを忘れうるくらい、一方に緊張していたと見ればそれまでですが、私の良心がまたそれを許すべきはずはなかったのですから。

Kに対する私の良心が復活したのは、私がうちの格子を開けて、玄関から座敷へ通るとき、すなわち例のごとく彼の部屋を抜けようとした瞬間でした。彼はいつものとおりに机に向かって書見をしていました。彼はいつものとおりに書物から目を離して、私を見ました。しかし彼はいつものとおりに帰ったのかとは言いませんでした。彼は「病気はもういいのか、医者へでも行ったのか。」と聞きました。私はその刹那に、彼の前に手をつけて、謝りたくなかったです。しかも私の受けたそのときの衝動は決して弱いものではなかったのです。もしKと私がたった二人曠野の真ん中にも立っていたならば、私はきっと良心の命令に従って、その場で彼に謝罪したろうと思います。しかし奥には人がいます。私の自然はすぐそこで食い止められてしまったのです。そうして悲しいことに永久に復活しなかったのです。

夕飯のときKと私はまた顔を合わせました。何にも知らないKはただ沈んでいただけで、少しも疑い深い目を私に向けません。何にも知らない奥さんはいつもよりうれしそうです。私だけが全てを知っていたのです。私は鉛のような飯を食いました。そのときお嬢さんはいつものようにみんなと同じ食卓に並びませんでした。奥さんが催促すると、次の部屋でただ今と答えるだけでした。それをKは不思議そうに聞いていました。しまいにどうしたのかと奥さんに尋ねました。奥さんはおおかたきまりが悪いのだろうと言って、ちよつと私の顔を見ました。Kはなお不思議そうに、何できまりが悪いのかと追及しにかかりました。奥さんは微笑しながらまた私の顔を見るのです。

私は食卓に着いた初めから、奥さんの顔つきで、事の成り行きをほぼ推察していました。しかしKに説明を与えるために、私のいる前で、それをことごとく話されてはたまらないと考えました。奥さんはまたそのくらいのことを平気でする女なのですから、私は冷や冷やしたのです。幸いにKはまたもとの沈黙に返りました。平生より多少機嫌のよかった奥さんも、とうとう私の恐れを抱いている点までは話を進めずにしまいました。私はほつと一息して部屋へ帰りました。しかし私がこれから先Kに対して取るべき態度は、どうしたものだろうか、私はそれを考えずにはいられませんでした。私はいろいろの弁護を自分の胸でこしらえて

みました。けれどもどの弁護もKに対して面と向かうには足りませんでした。卑怯な私はついに自分で自分をKに説明するのが嫌になったのです。